



「馬鹿ね。」

妻はぼくの目をまっすぐに見てそう言った。

「本当に馬鹿ね。」

「……………」

「より本質的に言わせてもらえば、あなたは存在が馬鹿  
そのものなのね。ここで馬鹿そのものとはあなたと馬鹿は  
一ミクロンのずれもないほど、合致しているという意味よ。」

「……………」

「私は、あなたに会うまでは、馬鹿というのは人類の最底辺だと思  
ってたわ。人類と言う物の床に張り付いている2次元の平面  
だとずっと思い込んでたのよ。

だけどあなたが私の固定観念を打ち砕いてくれたわ。

馬鹿と言うものは実は 位相空間だったの。」

「……………」

「例えば、殺されそうになった恋人を救うために危険なところに  
飛び込んで行った男がいたとするわね。

そして、その男は殺されてしまう。そのとき、その恋人は死んだ  
その男にこう叫ぶのよ。馬鹿あ〜！」

「……………」

「助かった恋人がレイプされたとか両親が殺害されたとかのトラウマがあつたなどの自尊感情を  
大きく損ねる過去があれば最高ね。ねえ。私が何を言いたいかわかるでしょう？」

「……………」

「つまり、馬鹿には愛される種類の馬鹿があるということよ。

当然のことながら、あなたは違う種類の馬鹿よ。」

「……………」

「その応用として尊敬される種類の馬鹿もあるわ。具体例は  
はぶくけどね。もちろん、あなたは違う種類の馬鹿よ。」

「……………」

「つまり、馬鹿には救いのある馬鹿と救いのない馬鹿があるのよ。  
私達は迂闊にもこの2種類の馬鹿を同じ馬鹿だと分類してしまつて  
る。だけど本当は違うの。

救いのある馬鹿は、本当の馬鹿ではない。偽造された馬鹿と呼ぶべきものよ。

私達が真に問題にすべきなのは救いのない馬鹿の方だったのよ。

言うまでもないけど、あなたは救いのない馬鹿よ。」

「……………」

「極限的に救いのない馬鹿よ。極限的に救いのない馬鹿とは、  
救いのない馬鹿というものを一つの単位とした場合、この単位を  
無限に加算したとしてその無限大にもう一つ、救いのない馬鹿を  
加算できるという意味で極限的なものよ。

別な例示をすると、救いのない馬鹿を無限数つれてきて殺害粉碎して、救いのない馬鹿成分を  
抽出とする。そして、その成分を無限回濾過して純度100%の救いのない馬鹿を作ったとする。  
それがあなたの存在よ。」

「それは違うよ。お嬢さん。」

突然、見ず知らずの男がぼくらの会話に割り込んだ。

「いいかい？そのような極端な成分を抽出し続けたら、それは馬鹿ではない。それはただの狂気だ。お嬢さんは知らず知らずのうちに救いのない馬鹿を特権化してたのさ。」

「馬鹿とはそんな高級なものではない。馬鹿とはもっとありふりた物だ。」

妻が驚いてぼくを見て、そして、ぼくを笑い始めた。  
見ず知らずの男もぼくを笑い始めた。

儼かに完